

ナウマンゾウ、忠類で沼にはまる

環境

第1章 十勝の平野や川ができるまで

第2章 先史時代と川

第3章 アイヌ文化と川

第4章 十勝開拓と川

第5章 発展、そして未来へ

用語

さくいん



ナウマンゾウ(手前)とその他の象(左からアジアゾウ(インドゾウ)、アフリカゾウ、マンモス)の模型。(忠類ナウマン象記念館)



(上左)沼にはまったナウマンゾウのジオラマ模型。(ジオラマ: 忠類ナウマン象記念館)

化石の発見

昭和44年(1969)の夏、道路の側溝をほっていた人たちのツルハシが、何か固いものにあたりました。測量助手をしていた小玉さん(当時15歳)がそれを見て、「これは象の歯だ」と声を上げました。教科書の写真を思い出したのだそうです。

この年、まず緊急の発掘調査がおこなわれ、臼歯(おく歯)2本のほかにキバやかたの骨、あばら骨の一部が発掘されました。このため、「1頭分の骨がうまっているかも知れない」と期待が高まりました。

そして翌年の昭和45年(1970)、十勝団体研究会のメンバーや専門家、工事の人たち、学生など、全国から集まった160人以上の手によって、ほぼ全身の化石骨(46点: 約75%)が発掘され、12万年ぶりにそのすがたを現しました。ただ、頭の骨はこわれていました。

およそ12万年前、地球は「リス氷期(p53)」と呼ばれる寒い時期を終え、今よりも暖かい時期(間氷期)をむかえていました。十勝では南部を中心として、あちらこちらに大小の湿原が広がっていました。

そのころ、十勝にはナウマンゾウという象が暮らしていました。ある時、ナウマンゾウの群れが今の忠類(幕別町)にあった沼にやってきました。水を飲みに来たのでしょうか。

その中の1頭(おとなのオス)が、沼に入ったところで死んでしまいました。ひょっとすると、沼の泥炭にあしをとられて動けなくなったのかも知れません。

泥炭土にうまったナウマンゾウ

ナウマンゾウの死体は、くさりきる前に土砂によってすぐ近くの沼底にうまりました。

沼(湿原)の底にある泥炭の中では、生き物の死体があまり分解されず(土にかえらず)長い間残ります。

ナウマンゾウの骨は、地中で長い眠りにつきました。



(上右)化石骨がうまっていたようすの再現模型。ほぼ1頭分の化石骨がまとまっていたことから、近くで死んだことがわかる。(忠類ナウマン象記念館)



昭和45年(1970)の本発掘の時のようす。寛骨(おしりの大きな骨)や脚の骨などをていねいにほり出している。(写真: 幕別町教育委員会教育課蔵)

1 12万年前(12まんねんまえ): 忠類ナウマンゾウの年代については、もう少し古いという考え、あるいは、ひとつ前の間氷期(かんびょうき)であるミンデル-リス間氷期(約40万-20万年前)だという考えもある。

2 湿原(しつげん): 水分の多いしめった草原。泥炭(3)ができる。

3 泥炭(でいたん): 湿原でかれた水草やコケの分解が進まず(あまり土にかえらず)、炭のようになっていったもの。石炭になり始める段階。

とにかく見てみよう ... 忠類ナウマン象記念館と発掘場所

忠類にある「ナウマン象記念館」では、復元された骨格標本（模型）を見ることができます。全長3.6m、頭の高さ2.4m、キバの長さ1.8mというすがたを目にしてください。

そして、インドでもアフリカでもない、この十勝に、この巨大な動物が生きていたことをイメージしてください。

記念館では、さまざまな解説のほか、発掘された時に化石骨がどううまっていたかの模型、化石が見つかった地層のようす、発掘で見つかった大昔の花粉やタネや昆虫の化石、などが展示されています。当時の十勝やナウマンゾウのことを、いろいろな角度から見せてくれます。

また、忠類市街から温泉のある晩成(忠類と大樹町)に向かって14 kmほど行った道わきに、「発掘跡地」があります。ちょっとした山の中です。かつてはここには、沼地や湿原があったのです。



忠類ナウマン象記念館(幕別町忠類白銀町383-1)と化石が発掘された場所(幕別町忠類字晩成)。



忠類ナウマン象記念館の復元骨格。



ナウマンゾウの化石が発掘されたところ。

🔍 歯のもようが決め手に ... 観察のポイント



かみ合わせ面のまよう

歯根



かみ合わせ面のまよう

(上) 忠類のナウマンゾウの臼歯(おく歯; 第3大臼歯)の複製。ギザギザなところが「歯根」。

(左) マンモスの臼歯(由仁町)の複製。



エゴノキのタネの化石。今の十勝には生えていない。

(写真は3点とも、忠類ナウマン象記念館の展示物)

「歯根」が大発掘のきっかけ

最初に「ナウマンゾウであろう」との決め手になったのが、臼歯のかみ合わせ面のもようです。他の象と比べてみましょう。

また、歯には「歯根」がついていました。歯根の先端は細くてもろいので、よそで死んでうまり土石流などで流されてきたのなら、なくなるはずなんです。

「これは、すぐ近くで死んだ象かも知れない。となると、1頭分の全身骨格が見つかるのではないか」

ナウマンゾウの全身骨格が見つかるのは、はじめてのことでした。その後の調査から、ますます期待はふくらみます(左ページ)。

翌年の本発掘の時、160人以上が調査に、約6,000人が見学にやって来るとい、おおさわぎとなりました。

タネや花粉でわかる当時の気候

地層からは、ブナやエゴノキといった、今では道南地方から南で生えている植物の花粉やタネなどの化石も見つかりました。当時は今よりも暖かい時期だったのです。

4 昭和44年(1969):この年の7月、アポロ11号が月に着陸し、人類が月面を歩いた。
5 化石(かせき):最近の研究によって、この時発見された化石の中にマンモスの歯の化石もふくまれていたことがわかった。(高橋・北川・漆田, 2008)

6 復元された骨格(ふくげんされたこっかく):頭骨は、発掘前にこわれていた。そこで、千葉県猿山で見つかった頭骨をもとに、復元された。